

第68回 豊崎由美アワー

年末特別企画

読んでいいとも！
ガイブンの輪

Vol.9

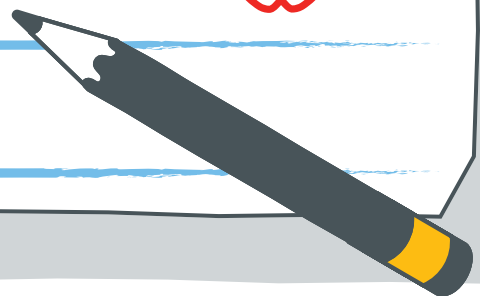
オレたち外文リーガーの
自信の1球と来年の隠し球

日時

2020年12月19日(土)

14時30分～17時30分

会場：本屋B&B



よんともゲスト一覧 (2009年第1回～第68回)

1 野崎欽さん	作品社、群像社]	社、河出書房新社、早川書房、
2 川上弘美さん	31 伊藤聡さん	藤原編集室、未知谷、水声社、
3 岸本佐知子さん	※本来は山崎さん→松田さん	東京創元社]
4 榎本俊二さん	→伊藤さん、の順でご紹介。	53 都築響一さん
5 本谷有希子さん	32 松田青子さん	54 朝吹真理子さん
6 [特別編：柴田元幸さん+若島正さん]	33 野谷文昭さん	55 鈴木杏さん
7 宮沢章夫さん	34 阿部賢一さん	56 ケラリーノ・サンドロヴィッチさん
8 前田司郎さん	35 小沼純一さん	57 [特別編：新潮社、クオン、
9 [特別編：大森望さん+岸本佐知子さん]	36 [特別編：国書刊行会、白水社、早川書房、群像社、作品社、松籟社、河出書房新社]	藤原編集室、集英社、国書刊行会、白水社、河出書房新社、早川書房]
10 石川直樹さん	37 中島京子さん	58 小橋めぐみさん
11 鴻巣友季子さん	38 星野智幸さん	59 福岡伸一さん
12 [特別編：群像社、水声社、未知谷]	39 西崎憲さん	60 柴田元幸さん
13 片岡義男さん	40 [特別編：天野健太郎さん、飯塚容さん、吉川凧さん、三浦順子さん]	61 [特別編：野谷文昭さん、斎藤文子さん、柳原孝敦さん、久野量一さん]
14 小池昌代さん	41 米光一成さん	62 木原善彦さん
15 青柳いづみこさん	42 [特別編：河出書房新社、群像社、国書刊行会、作品社、松籟社、白水社、早川書房、藤原編集室]	63 [特別編：新潮社、クオン、水声社、藤原編集室、集英社、国書刊行会、白水社、河出書房新社、早川書房]
16 古屋美登里さん	43 金原瑞人さん	64 柴崎友香さん
17 影山徹さん	44 酒寄進一さん	65 古川日出男さん (配信+人数限定来店参加)
18 [特別編：いしいしんじさん]	45 橋爪功さん	66 江國香織さん (配信+人数限定来店参加)
19 坂川栄治さん	46 石倉三郎さん	67 奥泉光さん (配信+人数限定来店参加)
20 藤田新策さん	47 [特別編：国書刊行会、白水社、早川書房、群像社、作品社、松籟社、河出書房新社、藤原編集室]	68 [特別編：河出書房新社、国書刊行会、集英社、白水社、早川書房、書肆侃侃房 (オンライン)、東宣出版] (配信)
21 滝本誠さん	48 中川五郎さん	69 山本貴光さん (配信+人数限定来店参加)
22 風間賢二さん	49 今福龍太さん	
23 高山宏さん	50 [特別編：藤原義也さん (藤原編集室)+西崎憲さん]	
24 [特別編：作品社、水声社、国書刊行会、白水社、早川書房、河出書房新社]	51 茅野裕城子さん	
25 安藤礼二さん	52 [特別編：国書刊行会、白水	
26 佐々木中さん		
27 海猫沢めろんさん		
28 山内マリコさん		
29 山崎まどかさん		
30 [特別編：河出書房新社、国書刊行会、白水社、早川書房、		

目次

河出書房新社

5

国書刊行会

11

集英社

14

書肆侃侃房 (オンライン出演)

18

東宣出版

24

白水社

26

早川書房

36

河出書房新社

<今年の自信の1球>

アンナ・バーンズ ミルクマン 榎木玲子訳

謎の牛乳配達人はテロリストなのか。国家独立をめぐるテロと性的抑圧を生きる18歳女性の不安と絶望を描いた傑作長篇。世界30か国以上で翻訳されたベストセラー。ブッカー賞受賞。

エドゥアルド・ヴェルキン サハリン島 北川和美・毛利公美訳

北朝鮮発の核戦争後、先進国で唯一残った日本は鎖国を開始。帝大の未来学者シレーニは囚人やゾンビ化した人間が蔓延するサハリン島に潜入する。この10年で最高のロシアSFとされる衝撃の傑作。

チャールズ・M・シュルツ ピーナッツ全集 全25巻 谷川俊太郎訳

1950年から半世紀にわたって連載された『ピーナッツ』全作品を初出順に収録。既訳は全面的に見直し、新訳・単行本未収録作品も多数。チャーリー・ブラウンたちが大活躍する決定版。

<来年の隠し球>

*タイトルはすべて仮題です。

1月

アネッテ・ヘス ドイツ亭 森内薫訳

ベストセラー『朗読者』を彷彿とさせるノンフィクション小説。1960年代の「アウシュヴィッツ裁判」で裁かれたナチス戦犯の中に父母を発見した女性主人公。崩壊する絶望の家庭と希望。

ジョン・マーズデン著 ショーン・タン絵 ウサギたち 岸本佐知子訳
大勢のウサギたちが外からやって来て大陸に蔓延し、先住者は危機に追いやられていく。ショーン・タンの美しいイラストとともに語られる建国寓話譚。オーストラリア児童文学賞受賞。

ローレン・グロフ 丸い地球のどこかの曲がり角で 光野多恵子訳
爬虫類学者の父と、本屋を営んだ母。かつて暮らした家には蛇が住み着いていた。幽霊、粘菌、オオカミ、ハリケーン……自然との境界で浮かびあがる人間の意味を物語性豊かに描く 11 の短篇。

2月

アンソロジー 覚醒するシスターフッド
発売即増刷となった『文藝』秋季号特集「覚醒するシスターフッド」の小説部分を単行本化。新たにサラ・カリー（岸本佐知子訳）、大前栗生氏の短編を収録。（収録作）桐野夏生「断崖式」、柚木麻子「パティオ8」、こだま「桃子さんのいる夏」、藤野可織「先輩狩り」、大前栗生「ドキュメント」、マーガレット・アトウッド「老いぼれを燃やせ」（鴻巣友季子訳）、ヘレン・オイェイエミ「ケンブリッジ大学地味子団」（上田麻由子訳）、文珍「星空と海を隔てて」（濱田麻矢訳）、キム・ソンジュン「未来は長く続く」（斎藤真理子訳）、大前栗生「ドキュメント」。

3月

クラリッセ・リスベクトール 星の時 福嶋伸洋訳
世界はひとつの Yes から始まった——リオのスラムに暮らす 19 歳のマカベアがみた一瞬の光。ブラジルの伝説的女性作家による代表作にして遺作。

ダニエル・ジョーンズ編 モダン・ラブ さまざまな愛のかたち
ニューヨークタイムズ紙の人気コラム。男女の恋愛に限らない広義の“愛”をテーマに書かれた実話は、その多様性に驚かされ、また励まされる。今の時代の愛のかたちを知る一冊。

ピアンカ・ピッツォルノ ミシンの見る夢 中山エツコ訳
イタリアの国民的作家の新作。階級格差の残る時代のイタリアが舞台で、みなし子のお針子が仕事を通して各家庭の様々な秘密を共有したり難題を乗り越えながら成長していく様子を描いた物語。

ワジディ・ムアマッド アニマ 大島ゆい訳
ネイティブ・アメリカンの血塗られた物語が、あらゆる獣の視点から語られる。映画『灼熱の魂』の原作者で、ベイルート生まれの世界的劇作家が描く、動物たちが見た血と暴力の連鎖がうみだす悲劇。

4月

ジュニー・ザン サワー・ハート 小澤身子和子訳
上海から NY に移住し極貧家庭で育つ少女が、上昇志向の親の抑圧を受けながらも成長する様をダークかつコミカルに描く、レナ・ダナムのレーベルからデビューしたアジア系アメリカ女性作家の 7 つの物語。

フェルナンド・アランブル 祖国 パトリア（上下） 木村裕美訳
本国スペインで 100 万部突破、海外版権 27 か国に売れ、HBO テレビシリーズ決定。バスク動乱の歳月を俯瞰した大きなテーマの小説。祖国とは？ 愛国心とは？

アンドリュース・キヴィラーク 蛇の言葉を話した男 関口涼子訳
エストニア史上最大のベストセラー。フランスではロコミで話題となり成功したエピック・ファンタジー。「この本はどんな本かって？ トールキン、ベケット、トウェイン、そして宮崎駿が世界の終わりに一緒に酒を呑みながら、この世の最後の焚火を囲んで語ってる、そんな話さ」

アンナ・ツィマ シブヤで目を醒まして 阿部賢一・須藤輝彦訳
プラハで日本文学を学ぶヤナは謎の日本人作家の消息を追い、一方ヤナの「分

身」は渋谷をさまよいつづけていた——。二つの物語が重なり合う、チェコの超新星による新世代ジャパネスク小説！

5月以降

ゴンサロ・M・タヴァーレス エルサレム 木下眞穂訳

5月の真夜中、死病を抱えたミリアは痛みから外へ駆け出した。ときを同じくして、狂気に駆られた男女5人が通りをさまよう……。現代ポルトガルの最重要作家による圧倒的代表作。

ジョゼ・サラマーゴ 中断する死 雨沢泰訳

ある年の元旦から突然人が死ななくなる。瀕死の皇太后、交通事故の犠牲者、危篤の患者たち……『白の闇』のノーベル賞作家が晩年に遺した傑作長篇。

ウィリアム・フォークナー 土にまみれた旗 諏訪部浩一訳

20世紀世界文学における最大級の物語「ヨクナパトーファ・サーガ」幻の第1作がついに初邦訳。苛烈なる生と極限の滅びを描くアメリカ南部の物語、すべてはここからはじまった。

20世紀世界文学における最大級の物語「ヨクナパトーファ・サーガ」幻の第1作がついに初邦訳。苛烈なる生と極限の滅びを描くアメリカ南部の物語、すべてはここからはじまった。

フランソワーズ・サガン 心の四つの隅 河野万里子訳

死後15年を経て発見され、世界中を賑わせた幻の未発表作、ついに邦訳。80年代フランスの大富豪・クレソン家の城館を舞台に繰り広げられる、愛とたくらみに満ちたサガン一流の悲喜劇。

トーマス・ベルンハルト 訂正 飯島雄太郎訳

自死した友人の遺稿整理をすることになった主人公は、友人が自分の「訂正」として自死したことを知る。その過程が主人公の果てしもないモノローグによって迎えられる地獄めぐりのような暗澹たる名作。

盛可以 子宮 河村昌子訳

莫言が推薦する中国フェミニズム作家・初の長編邦訳。80年代、一人っ子政策により子宮内リングの着用を強いられすべての生殖を監視された世代を間に、ある家族の4世代の女性たちを描く。

呉明益 雨の島 及川茜訳

『歩道橋の魔術師』などで知られる台湾の作家・呉明益の短編小説集。近未来を舞台に六つの物語を通じて人、動物、自然、土地の関係性を探求する。

ファン・ジョンウン 年年歳歳 斎藤真理子訳

日本語で「従順な子」という名で育った母スニルとその子どもたちの、過去、現在、そして未来。時を超え、人は人を思い、ゆえにこの世界の不条理に拳を握り血の涙を流す。2019年「小説家50人が選んだ今年の小説」第1位の作家による最高傑作。

クォン・ヨソン 知らない領域 斎藤真理子訳

社会の歪みをさまよう人々の引き裂かれた生を、ユーモアと悲哀と苦い優しさで描き出した短編集。都市のやるせない肖像をえぐりながら、あたたかな余韻を残す韓国リアリズムの極北。

トーマス・ベルンハルト 木を伐る 初見基 訳

84年発表の自伝的長編小説。語り手は旧友のアウアースベルガーに招待されるが、そこには頹落した芸術家たちの姿があった。語り手は晩餐会の片隅に潜みながら出席している芸術家たちを罵倒し続ける。国際的評価の機となった作品。

トーマス・ベルンハルト 混乱 池田信雄訳

長編第二作。鉦山学を専攻する大学生が医者の父と山岳地帯をめぐって住人たちの重い病いと出会っていく前半、その医師の患者でもある城主の狂気のモ

ノログによる後半によって構成され、暗黒と絶望のベルンハルト的世界が展開する

バタイユ 内的体験 江澤健一郎訳

バタイユの思考が炸裂する代表作を『有罪者』『ドキュマン』の名訳を手掛けた気鋭がついに新訳。混迷の時代に打ち下ろされる思想のハンマー。河出文庫。

閻連科 日熄 泉京鹿訳

ある日突然太陽が死に絶え、夢遊病に取り憑かれた人々が街にあふれだす。欲望をさらけだし、盗み、奪い、殴りあい、殺人を犯す。生も死も管理される現代中国の心を描く別次元の傑作。

国書刊行会

*藤原編集室本

R・オースティン・フリーマン『ソーンダイク博士短篇全集Ⅲ パズル・ロック』 瀧上瘦平訳

ジョゼフ・グッドリッチ編『エラリー・クイーン 創作の秘密 往復書簡 1947-1950』 飯城勇三訳

コリン・ディッキー『ゴーストランド 幽霊のいるアメリカ史』 熊井ひろ美訳

<今年のイチオシ>

ウィリアム・トレヴァー『ラスト・ストーリーズ』(栩木伸明訳)

クレメンス・J・ゼッツ『インディゴ』 犬飼彩乃訳 3月刊

ジョージ・W・M・レノルズ『人狼ヴァグナー』 夏来健次訳 6月刊

アレハンドロ・ホドロフスキー『サイコマジック』 花方寿行訳 3月

ジェイムズ・ブランチ・キャベル『土の人形・マニユエル伝3』 安野玲訳 4月

ジェローム・K・ジェローム『ジェローム・K・ジェローム怪奇小説集』 中野善夫訳 5月

アレイスター・クロウリー『法の書〈完全版〉』植松靖夫訳 9月

〈タリアイ・ヴェーソス・コレクション〉全3巻『氷の城』『鳥』『風』朝田千恵、アンネ・ランデ・ペータス 共訳 秋以降

ボブ・ワード『ドクター・スペース ウェルナー・フォン・ブラウン伝』日暮雅通訳／序文=ジョン・グレン

シャルロット・ド・ラトゥール（ルイ=エメ・マルタン）『花々の言葉 世界で初めての花言葉事典』三宅京子訳

ガードナー・ドゾワほか『海の鎖』〈未来の文学・最終巻〉伊藤典夫編訳

パトリック・マッケイブ『ブッチャー・ボーイ』矢口誠訳

ジョン・ウォーターズ『ジョン・ウォーターズの地獄のアメリカ縦断ヒッチハイク』柳下毅一郎訳

『ユーモア・スケッチ大全』全4巻 浅倉久志訳

『缶詰サーディンの謎』〈ドーキー・アーカイヴ〉ステファン・テマソン／大久保護訳

アイリス・オーウェンス『アフター・クロード』〈ドーキー・アーカイヴ〉渡辺佐智江訳

『ディンマスの子供たち』〈ウィリアム・トレヴァー・コレクション〉宮脇孝雄訳

『アルフレッド・ジャリ全集』宮川明子他訳

トマス・M・ディッシュ『SFの気恥ずかしさ』浅倉久志・姫嶋由布子訳

ルイズ・ブルックス『ハリウッドのルル ルイズ・ブルックス自伝』宮本高晴訳

エイドリアン・トミネ『長距離漫画家の孤独』長澤あかね訳

集英社

今年のイチオシ

「語りなおしシェイクスピア」シリーズ

四百年の長きにわたり、世界中で愛され、戯曲が上演され続けてきた天才劇作家シェイクスピア。その名作を、現代のベストセラー作家たちが“語りなおす”新シリーズ。

マーガレット・アトウッド 『語りなおしシェイクスピア 1 テンペスト 獄中シェイクスピア劇団』 鴻巣友季子 訳

復讐と赦し、再生を描くシェイクスピア最後の傑作『テンペスト』を、M・アトウッドが現代の刑務所を舞台にマジカルにリトールド。辛辣でユーモラスな展開の末に深い感動が待ちうける。ラップ、罵倒語など、はじける鴻巣訳はまさに圧巻！

アフマド・サアダーウィー 『バグダードのフランケンシュタイン』 柳谷あゆみ 訳

2005年のバグダード。連日自爆テロが続く中、爆破で吹き飛んだ遺体のパーツを繋ぎ合わせた怪物が、己に死をもたらした人間たちに復讐を誓う。アラブ国際小説賞受賞、ブッカー国際賞&アーサー・C・クラーク賞最終候補作。

来年の隠し球

※日本語タイトルはすべて仮題です。

※内容、刊行年は変更になる可能性があります。

エドワード・セント・オービン 『語りなおしシェイクスピア 2 リア王メディア王ダンバー』 小川高義 訳

実の父親から性的虐待をうけ続けた幼年時代、その後の薬物依存、という自らの体験をもとに、英国上流階級の腐敗を描いた『パトリック・メルローズ』シリーズの作者が、権力に溺れた父親『リア王』を語りなおす。

サーシャ・フィリペンコ 『理不尽ゲーム』 奈倉有里 訳

現在も国家 VS 民主化運動の抗争が続くベラルーシ。その内実を描く小説を緊急出版！ 10年の昏睡から目覚めた青年が見たものは、以前と同じ大統領と、その驚くべき理不尽な支配体制であった。2009年の独裁国家を舞台に、真のディストピアを虚構で語る、未来（いま）へと続く物語。

クロエ・ベンジャミン 『The Immortalists』(原題) 鈴木潤 訳

もし、幼くして自分の寿命を知ってしまったら、人はいかに生きるのか？ そのことによって運命も変わってしまうのか？ 軽い気持ちで霊能者に会いに行き、自分が死ぬ日を告げられた四人の姉弟の40年を描く話題作。

ユーディット・W・タシュラー 『誕生日パーティー』 浅井晶子 訳

オーストリアに暮らすカンボジア移民のキム。その50歳の誕生日パーティーに子供が呼んだサプライズゲストは、キムがポル・ポト政権下の凄惨な内戦を共に生き延びた相手であり、最も会いたくない女性だった。『国語教師』著者による最新長編。

ロベルト・ヴェラーヘン 『アントワネット』 國森由美子 訳

オランダ新進気鋭の作家による、美しい筆致の文芸作品。「ぼく」と妻アントワネットの間は子供に恵まれなかった。検査を受けるも、原因は不明。二人の心は疲れ、すれ違い、妻は心を病んでいく…。不妊治療と人生のままならなさを男性目線から描く。

アン・タイラー 『語りなおしシェイクスピア 3 じゃじゃ馬ならし ヴィネガー・ガール』 鈴木潤 訳

“じゃじゃ馬”な妻を眠らせずに無理やり従順にさせるという喜劇を、アン・タイラーが語りなおし。変わり者といわれる娘が、やはり変わり者の男性と出会い惹かれていく、心にしみるロマンチック・コメディに。

サーシャ・フィリペンコ 『赤い十字』 奈倉有里 訳

寡夫の青年が引っ越し先で出会った隣の部屋に暮らす老女。記憶の喪失を恐れた彼女は、青年に生い立ちを話し始めた。ソ連の外務省で翻訳の仕事をしてきたこと。捕虜リストの中に夫の名前を見つけたこと。国が捕虜を反逆者と見なしていたこと…。第二次世界大戦の惨禍とソ連体制の冷酷さを、ベラルーシ気鋭の作家が語る。アレクシエーヴィチ推薦。

モニク・トゥルン 『かくも甘き果実』 吉田恭子 訳

最後は「作家・小泉八雲」となった男ラフカディオ・ハーンの生涯を、友人のジャーナリスト、母、最初の妻、2人目の妻の視点で描く。実際に刊行された友人による伝記（未邦訳）からの引用と、「言葉」を持たず不可視化された女性たちの胸の内という、4人の女性の声で「ここではないどこかを求め続けた男」を浮かび上がらせる伝記的フィクション。

アンヌ＝マリー・ルヴォル 『L'ÉTOILE RUSSE』(原題) 河野万里子 訳

ソ連の英雄、宇宙飛行士ガガーリンを巡る連作短編集。宇宙飛行からの着地に居合わせた農婦の恐怖、ライバル宇宙飛行士の独白、英雄に撞れる少女の物語など、ガガーリンを中心にした様々な人物を主人公に据える。ヒーローに祭り上げられた朴訥な男の悲哀、ソ連の体制と市井の人々を描く。

ケヴィン・ウィルソン 『Nothing to See Here』(原題) 芹澤恵 訳

リリアン 28 歳、スーパーのレジ係、時々つまらない男とデートして、実家の屋根裏でマリファナを吸う。そんな彼女が旧友から家庭教師を頼まれた双子は、興奮すると体から〈火を噴く〉特異体質だった!? 笑いと涙で〈リアル〉に描く、風変わりな愛情とちょっぴり複雑な友情の物語。

シルヴィア・プラス 『シルヴィア・プラス短編集』 柴田元幸 訳

一昨年秋、プラス 20 歳のときの作品が見つかり話題となった。その短編「メアリ・ヴェントゥーラと第九王国」(『すばる』新年号掲載/発売中)と、さらに訳者の柴田元幸氏が今の時代にこそ読んでほしいと考えるプラスの短編7つ

を選び、解説とともにお届けする。

書肆侃侃房

◇今年のイチ押し

ツェワン・イシュ・ペンバ『白い鶴よ、翼を貸しておくれ』星泉訳

1925年、若きアメリカ人宣教師スティーブンス夫妻は、幾多の困難を乗り越え、チベット、ニャロン入りを果たした。現実には厳しく、布教は一向に進まなかったが、夫妻は献身的な医療活動を通じて人びとに受け入れられていく。やがて生まれた息子ポールと領主の息子テングは深い友情で結ばれる。だが、穏やかな日々も長くは続かない。悲劇が引き起こす怨恨。怨恨が引き起こす復讐劇。そして1950年、新たな支配者の侵攻により、人びとは分断され、緊迫した日々が始まる。ポールもテングもその荒波の中、人間の尊厳を賭けた戦いに身を投じてゆく。亡命チベット人医師が遺したチベット愛と苦難の長編歴史小説。

徐嘉澤『次の夜明けに』（現代台湾文学選1）三須祐介訳

1947年、二二八事件に始まる台湾激動の頃。民主化運動で傷つき、それまでの生き方を変えなければならなくなった家族。新聞記者の夫とともに、時代の波に飲まれないよう、家族のために生き、夫の秘密を守り続けて死んでいった春蘭（チュンラン）。残された二人の息子、平和（ピンホー）と起義（チーイー）は、弁護士と新聞記者として、民主化とは、平和とは何かを追求する。起義の息子、哲浩（ジョーハオ）は、歴史にも政治にも関心がなく、ゲイだと告白することで一步を踏み出す。三代にわたる家族の確執を軸に、急激に民主化へと進む時代の波に翻弄されながらも愛情を深めていく一家の物語。

李箱、李孝石、蔡萬植、金南天、李無影、池河蓮『失花』（韓国文学の源流シリーズ／短編選3）オ・ファスン、岡裕美、カン・パンファ訳

モダニズム作家、李箱の遺稿で、死後に発表された『失花』。妻の死後、中国を旅し、華やかな都会の中の孤独をアイロニーをこめて描いた『ハルビン』。日本にいられなくなり新しい生活を求めてやってきた澄子と、雑誌社に勤めながら小説を書く作家との愛の逃避行『冷凍魚』。思想犯として投獄された男に

本を差し入れ、一時釈放を待つ女を待ち受ける厳しい現実を描いた『経営』。変わりゆく農村を舞台に土とだけ向き合って生き、すべてを失ったあと自らの命を絶つ父。帰郷し田んぼに出てはじめて父の思想にめざめる『土の奴隷』。妻とその女友だちとの交流を通して男と女の不可解な感情とすれ違いを描いた『秋』。日本統治時代、戦争の影が色濃くなる中、荒れ狂う時代の波に翻弄される主人公たちの恋愛、家族、そして職場での人間模様……。当時を代表する作家たちが綴る名作六編。

韓勝源『月光色のチマ』（韓国文学の源流シリーズ／長編）井手俊作訳

日本による植民統治時代に生まれ、露草のように美しく生きた気丈な母チョモン。半島南部のとある海辺風景をバックに、激動の時代の約一世紀を強く生き抜いた母の生涯を叙情あふれる筆致で描く傑作長編。ハン・ガンの父で韓国を代表する作家ハン・スンウォンの自伝的作品。

チュ・ウンミ『第九の波』（韓国女性文学シリーズ8）橋本智保訳

石灰鉱山にまつわる謎の死、カルト宗教団、原子力発電所誘致をめぐる対立……欲望渦巻く陟州で、翻弄される3人の男女。2012年に実際に起こった事件をモチーフにした、社会派×恋愛×ミステリー。小山田浩子さん推薦！

キム・ヘジン『オビー』（韓国女性文学シリーズ9）カン・パンファ、ユン・ブンミ訳

巨大な物流倉庫の職場で出会った、自分本位で他人と関わろうとしないオビーと、同調することばかりを考える自分との違いに心乱される「オビー」、チキン配達で出会った自殺願望のある男とのやりとりを滑稽に描いたデビュー作「チキン・ラン」、彼女にふられ、あてもなく訪れた公園で老人に誘われ始めたなわとびで、別れた彼女との気持ちを少しずつ整理する「なわとび」、スランプを抱えて筆が進まない語り手と、英語教室で出会った異国のワワとの心の触れ合いが行き着く先を描いた「ドア・オブ・ワワ」など、今を生きる不安定な若者たちの仕事や社会との関わりを描いた9編を収録。『中央駅』『娘について』のキム・ヘジン、待望の短編集。

青木耕平、加藤有佳織、佐々木楓、里内克巳、日野原慶、藤井光、矢倉喬士、吉田恭子『現代アメリカ文学ポップコーン大盛』

文学からアメリカのいまが見えてくる。更新され続けるアメリカ文学の最前線！「web 侃侃」の人気連載ついに書籍化。ブラック・ライブズ・マター（BLM）、ノーベル文学賞を受賞したばかりの詩人ルイーザ・グリュックなど最新の動向についても大幅に増補した決定版。座談会「正しさの時代の文学はどうなるか？」（ゲスト：柴田元幸さん）を収録。

◇来年の隠し玉

モナ・アワード『ファットガール 13の物語』加藤有佳織・日野原慶訳

テーマは体のかたち。作者の言葉を借りるならばボディ・イメージ。主人公はカナダのミシサガに暮らすエリザベス。インディーズ音楽とファッションをこよなく愛する彼女。特別な人生を望んではいない。ただ普通にしあわせになりたい。けれど高校でも大学でも、バイトをしても派遣社員となっても、結婚しても離婚しても、そして、太っていても痩せていても、体の「サイズ」への意識が途絶えることはない。自分と同じ失敗をさせまいとする母親、近くて遠い友だちメル、音楽を介してつながったトム、職場の女性たち。彼らとの関係のなかで、傷つけ、傷つけられ、他者と自分を愛する方法を探して、もがく。そんな彼女の姿が13編から浮かぶ。

アルフィアン・サアット『マレー素描集』藤井光訳

表彰式で大統領と握手ができなかったマレー系の女子学生、ふと交番に現れて無言で去っていくマレー系の女性、認知症の進行を認めず、マレーの民話に出てくる幽霊のしわざだと言いつる父親と同居する息子……掌編それぞれでひとりの人間に焦点を当て、マレー共同体の内外を貫くシンガポール社会の姿を巧みに浮かび上がらせるインドネシア系作家の掌編集。

エンリーケ・ビラ=マタス『永遠の家』木村榮一訳

スペイン文学の人気作家、4冊目の邦訳作品。彼の生まれたカタルーニャ地方は、アントニア・ガウディやサルバドール・ダリ、ジョアン・ミロを輩出した土地で、ビラ=マタスもまた、彼らの系譜に連なるひとり。『永遠の家』は、ある腹話術師が語り手となって、出会う人ごとの物語を語るのであるが、腹話術師が次々に声を変えていくように、物語の主人公も変わっていく。読み終わったとき、不思議な世界をのぞかせてもらった心持ちになる。

ジョゼ・サラマーゴ『象の旅』木下真穂訳

16世紀半ば、ポルトガル国王からオーストリア大公への贈物にされた1頭のインド象が、象遣いと護衛隊に付き添われてリスボンからウィーンまで、ほぼ徒歩で旅をした、という実話を基にした作品。描き出されるのは象そのものではなく、象遣い、護衛隊の兵士、大公、旅の途中で出会う村人たちなど、象を巡る人々。これまで邦訳された作品とは趣を異にする皮肉と笑いに満ちた作品で、著者自身は「人間の生」のメタファー」と評する。サラマーゴは本作の執筆にとりかかって間もなく、重篤な病を得て長期の入院を余儀なくされた。復帰も危ぶまれたが、不屈の精神で生還して書き上げた、生命力に満ちた物語。

黄崇凱『冥王星より遠いところ』（現代台湾文学選2）明田川聡士訳

黄崇凱は、台湾の雲林生まれ。80年代生まれの作家としては初めて、台湾で最も権威があるといわれる「中國時報」開巻ベストテンに選出されるなど、数々の受賞歴がある。若手人気作家の描く一種の妄想小説。彼の作品の初邦訳は「カピバラを盗む」（「たべるのがおそい」vol.3掲載、天野健太郎訳）で、本作は初めての邦訳単行本となる。

ユン・ソンヒ、ペク・スリン、カン・ファギル、ソン・ボミ、チェ・ウンミ、ソン・ウォンピョン『私のおばあちゃんへ（仮）』（韓国女性文学シリーズ10）橋本智保訳

『私のおばあちゃんへ』（2020年）は韓国文学の中心で活躍している6人の女性作家によるアンソロジーです。「6人6色の饗宴」と評されているこの作品は、個性豊かな6人の作家によって、これまでほとんど注目されなかった老

年女性くおばあちゃん>の生がいろいろな角度から立体的に描かれています。ミステリー、SFふうなものから、ロマンス、家族ドラマと様々です。おばあちゃんの人生を想像するだけでなく、「老い」ということについて考えさせられる一冊。

著者6人:ユン・ソンヒをリーダーに、ベク・スリン(『惨憺たる光』)、カン・ファギル、ソン・ボミ(『ヒョンナムオッパへ』)、チェ・ウンミ(『第九の波』)、ソン・ウォンピョン(『アーモンド』)

ベク・スリン『夏のヴィラ』(韓国女性文学シリーズ11)カン・バンファ訳
「鳥の羽のように軽やかに舞っていた花びら、鮮緑の木の葉の合間に揺れていた初夏の光、風が吹けば木の葉は密語を交わすかのようにささやき合う」美しく繊細な文章で、宇宙ほどにも捉えがたい人の心を追い続けるベク・スリン。決して理解しきることなどあるはずもないのだが、そこによぎる一筋の彗星のような軌跡を目の当たりにさせてくれる。『惨憺たる光』では、光に至るまでの深くもあてどない闇を置き去りにしない慈愛のような作品たちを届けてくれた。今作『夏のヴィラ』では、人と人、世界と世界の境界線を静かに見つめることで、私たちがこの入り組んだ世界でいかに関係しながら共存しているのかを考えさせてくれる。

羅恵錫、田栄沢、朴英熙、朱耀燮、崔曙海、玄鎮健、廉想涉、金東仁、兪鎮午『K博士の研究(仮)』(韓国文学の源流シリーズ/短編選1)岡裕美、オ・ファスン、金志映、カン・バンファ訳

1918年から1929年に刊行された9作品を収録。羅恵錫「瓊姫」、田栄沢「天痴?天才?」、朴英熙「獵犬」、朱耀燮「人力車夫」、崔曙海「朴トルの死」、玄鎮健「B舎監とラブレター」、廉想涉「南忠緒」、金東仁「K博士の研究」、兪鎮午「五月の求職者」を収録予定。同時代の日本では、芥川龍之介「蜘蛛の糸」「邪宗門」、室生犀星「性に目覚める頃」、武者小路実篤「友情」、谷崎潤一郎「卍」、小林多喜二「蟹工船」、島崎藤村「夜明け前」などが発表されている。

朴花城、李孝石、金裕貞、李箕永、朴榮濬、朴泰遠、玄徳、李泰俊『オリオ

ンとリンゴ(仮)』(韓国文学の源流シリーズ/短編選2)小西直子、岡裕美、李聖華、カン・バンファ訳

1932年から1938年に刊行された8作品を収録。朴花城「下水道工事」、李孝石「オリオンとリンゴ」、金裕貞「山あいの旅人」、李箕永「鼠火」、朴榮濬「模範耕作生」、朴泰遠「芳蘭亭主人」、玄徳「石亀」、李泰俊「江冷」を収録予定。同時代の日本では、山本有三「女の一生」、堀辰雄「美しい村」、谷崎潤一郎「春琴抄」、川端康成「雪国」、火野葦平「土と兵隊」「麦と兵隊」が発表されている。

東宣出版

☆今年のおすすめ

アンドレ・アレクシス『十五匹の犬』金原瑞人／田中亜希子訳（はじめて出逢う世界のおはなし）

動物が人間の知性を持ったら、幸せになるのか、不幸になるのか。

ギラー賞、ライターズ・トラスト・フィクション賞受賞、一風変わった動物寓話。

カナダ・トロントのレストランバー〈ウィート・シーフ・タヴァーン〉で、ギリシア神話の神アポロンとヘルメスがビールを飲みながら、他愛もない話に興じている。話の流れから、ふたりは動物が人間の知性を持ったとしたら、幸せになるか、不幸になるかで、賭けをすることにした。何匹かの動物を選び、そのうち一匹でも死ぬときに幸せだったらヘルメスの勝ち、不幸だったらアポロンの勝ちだ。ふたりは、近くの動物病院にたまたま預けられていた十五匹の犬を賭けの対象に選ぶと、十五匹の犬はとつぜん、人間の知性を与えられ、変化をはじめた。

ベルトルト・ブレヒト『アルトゥロ・ウイの興隆／コーカサスの白墨の輪』酒寄進一訳

ブレヒト亡命時代の2作品、新訳！

ヒトラーが独裁者として成り上がっていく過程を、シカゴのギャングの世界に置きかえて描き、ポピュリズムへの警鐘を鳴らした「アルトゥロ・ウイの興隆」。血のつながりもない子を必死で育てる娘グルーシェの姿にとわか裁判官アズダクによる大岡裁きを通し、戦争で荒廃した人々の心の再生（対立の和解）を謳った「コーカサスの白墨の輪」。亡命時代に書かれ、ともに時代と切り結んだブレヒトを象徴する作品。

ディーノ・ブッツァーティ『怪物』長野徹訳（ブッツァーティ短編集）

幻想と寓意とアイロニーが織りなす未邦訳短篇集第3弾。

〈なんてこった！ おれたちは入っちゃった！……〉謎のメッセージを残

し、地球の周りを回りつづける人工衛星の乗組員が見たものとは？……人類に癒しがたい懊悩をもたらした驚愕の発見を語る「一九五八年三月二十四日」、古代エジプト遺跡の発掘現場で起きた奇跡と災厄を描く「ホルム・エル＝ハガルを訪れた王」、屋根裏部屋でこの世のものとは思われない、見るもおぞましい生き物に遭遇した家政婦兼家庭教師の娘が底知れぬ不安と疑念にからめとられてゆく「怪物」など、全18篇を収録。

☆来年の隠し玉

◎スペイン語圏女性作家の短篇選集を2つ。

シルビナ・オカンポ『シルビナ・オカンポ短篇選（仮）』松本健二訳（はじめて出逢う世界のおはなし）

シルビナ・オカンポの本邦初の短篇選集。処女作（1937年）から1970年までに書かれた5つの短篇集から訳者が選んだ36篇を収録。夢と幻想、猟奇とユーモアが渾然となった宝石のような妖しい魅力を放つ作品を書くシルビナは、ビオイ・カサーレスの妻であり、姉はアルゼンチン文壇の重鎮として活躍したビクトリア・オカンポ、そしてその両者と深い関係にあったホルヘ・ルイス・ボルヘスと親密な交流があったことで知られる。

アナ・マリア・マトゥーテ『マトゥーテ短篇選（仮）』宇野和美訳（はじめて出逢う世界のおはなし）

20世紀スペインを代表する女性作家マトゥーテの本邦初の短篇選集。幼少期に祖父母の家で見聞きした、村の暮らしをもとに書かれた『アルタミラの物語』Historia de la Artámila（1961）を中心に、1950年代から60年代に書かれた4つの短篇集から訳者が選んだ21篇を収録。静謐で不思議な世界を、繊細さと透明感とを備えた文体で描く。セルバンテス賞受賞作家。

白水社

「今年のイチオシ」

1月

【エクス・リブリス・クラシックス】

H・G・ウェルズ『ポリー氏の人生』（高儀進訳）

「SFの父」が自身の青少年時代を投影し、下層中産階級の苦悩をコミカルに描く。虐げられた者への同情と格差社会への憤り。作家自ら、最愛の作品と認める自伝的長篇。本邦初訳。

【Uボックス 海外小説 永遠の本棚】

ナターリヤ・ソコロワ『旅に出る時ほほえみを』（草鹿外吉訳）

《人間》が怪獣をつくりだした。合金の骨格に緑色の人工血液、生肉を動力源とする鉄製の怪獣17Pは、前肢の鑿岩機で地中を進み、また拙いながら人間のことも話した。怪獣を創造した科学者、《人間》は自ら怪獣に乗りこみ、地下潜行試験を繰り返していた。一方、市内で発生したストライキを鎮圧した国家総統は独裁体制を押し進める。「旅に出る時ほほえみを……」金属製の怪獣の歌う声が心に響く、現代のおとぎ話。

3月

【エクス・リブリス】

テレツィア・モーラ『よそ者たちの愛』（鈴木仁子訳）

この世界になじめないよそ者たち——。孤独や言い知れぬ閉塞感を抱えながら、都市の片隅で不器用に生きる人々。どこにでも、誰のなかにも存在する〈よそ者〉たちの様々な思いを描く。ブレーメン文学賞受賞作品。ドイツ語文学の最高賞、ビューヒナー賞受賞作家による短篇集。

5月

【エクス・リブリス】

ダヴィド・フェンキノス『シャルロッテ』（岩阪悦子訳）

アウシュヴィッツに送られ、26歳の若さで命を落とした天才画家シャルロッテ・ザロモン。ユダヤ人として生まれたがゆえの短くも鮮烈な一生を、散文詩のような一行を重ねた切り詰められた文体で綴る。ルノー賞、「高校生が選ぶゴンクール賞」をダブル受賞し、24の言語に翻訳されたフランスの人気作家による新たな代表作。

【Uボックス 海外小説 永遠の本棚】（出淵敬子訳）

ヴァージニア・ウルフ『フラッシュ 或る伝記』

コッカー・スパニエルのフラッシュは、著名な女性詩人エリザベス・バレットへの贈り物として、ロンドンへやってきた。病弱でひきこもりがちな主人の家でフラッシュは都会の生活になじんでいく。そこで目にした主人エリザベスの恋愛、父親の抑圧、犬泥棒とスラム街訪問、イタリアへの駆け落ち……。犬の目を通して詩人エリザベス・ブラウニングの人生を描く、「犬好きによって書かれた本というより、むしろ犬になりたいと思う人によって書かれた本」。

7月

スティーン・ミルハウザー『ホーム・ラン』（柴田元幸訳）

魔法の鏡磨きが男と恋人の心にもたらす光と影を描く「ミラクル・ポリッシュ」。町に謎の自殺願望が流行した半年を記録する「私たちの町で生じた最近の混乱に関する報告」。一本の決定的本塁打がたどる驚異の軌跡を描く表題作など、多彩な奇想、緻密な筆で壮大かつ深遠な宇宙を描く8篇。著者自身による短篇小説論も収録（日本版のみ）。

【エクス・リブリス・クラシックス】

イーヴリン・ウォー『誉れの剣I つわものども』（小山太一訳）

作家が晩年、自身の戦争体験をもとに書き上げた集大成的作品《誉れの剣》三部作。名家出身の中年男ガイ・クラウチバックが「大義」に身を捧げようと第二次世界大戦の戦場に赴くが、そこで旧来の紳士の理想が崩壊していく様を目撃、幻滅を味わう物語。戦争に巻き込まれた人々の滑稽でグロテスクな生態を、ガイの目を通したエピソードの連続で描き、「第二次大戦が生んだ最も優

れたイギリス小説」と評される名作。本邦初訳。

8月

【エクス・リブリス】

ジョゼ・エドゥアルド・アグアルーザ『忘却についての一般論』（木下眞穂訳）
27年間にわたる泥沼の内戦下に孤立して暮らし、独力で生き抜いた女性ルド（ルドヴィカ）をめぐる奇想天外な物語の数々。ダイヤモンドを飲みこんだ伝書鳩、消息を絶ったフランスの作家、その足取りを追うジャーナリスト、ストリート・チルドレンとして生きる孤児……ルドを取り巻く魅力的で謎めいた登場人物たちのエピソードの間に、ルドの美しい詩や散文が挿入され、詩的でユーモラスな語りを通じてめくるめく物語が交錯する。2013年度フェルナンド・ナモーラ文芸賞、2017年度国際ダブリン文学賞を受賞、稀代のストーリーテラーとして知られるアンゴラの作家による傑作長篇。

【U ブックス 海外小説 永遠の本棚】

ジャック・ロンドン『赤死病』（辻井栄滋訳）

疫病による人類滅亡を予言した驚愕のSF「赤死病」、人口が急増した中国の絶滅を図るため細菌兵器による戦争を描いた衝撃作「比類なき侵略」、二作に連なる地球規模の文明観が展開されるエッセイ「人間の漂流」を収録。柴田元幸氏推薦！

9月

【エクス・リブリス】

アザリーン・ヴァンデアフリートオールミ『私はゼブラ』（木原善彦訳）

「文学以外の何ものをも愛してはならない」。父から教え込まれた家訓を胸に、若き文学至上主義者ゼブラが、文学に時に救われ、時に囚われながら、度重なる亡命で分裂した自己を取り戻し、新たな愛に目覚めていく。イラン系アメリカ人作家による、現代版『ドン・キホーテ』ともいうべき傑作長篇。PEN／フォークナー賞受賞作品。

10月

【U ブックス 海外小説 永遠の本棚】

イタロ・カルヴィーノ『まっぶたつの子爵』（村松真理子訳）

トルコとの戦争へ出かけた若き子爵メダルドは、敵の砲弾で体をまっぶたつに引き裂かれるが、奇跡的に一命をとりとめ、右半身だけの体で領地に帰ってきた。しかしその性格は以前とは一変、人々は半分になった子爵が領内に落とす邪悪な影に怯え始める。人間存在の歴史的進化を寓話的に描いた三部作《我々の祖先》の第一作『まっぶたつの子爵』新訳に、三部作執筆の経緯を自ら明かしたエッセー（本邦初訳）を収録。

11月

【エクス・リブリス・クラシックス】

クリストファー・イシャウッド『いかさま師ノリス』（木村政則訳）

1930年、ウィリアムはベルリンへ向かう列車でアーサー・ノリスと知り合った。立派な身なりをした教養人で貿易業をしているという。ワイマール文化が咲き誇るベルリンで、ノリスを介してウィリアムは一癖も二癖もある面々と出会う。ノリスは贅沢な乱痴気生活をしては困窮して姿を消し、再び現れたときには大金を手に入れている……。ナチス台頭前夜の狂乱の日々を鋭い洞察力で描く、イシャウッドの予見的傑作、新訳で登場。

【U ブックス 海外小説 永遠の本棚】

ラルフ・エリスン『見えない人間 上下』（松本昇訳）

僕は見えない人間である学長の怒りを買って大学を追い出された黒人青年はニューヨークで新たな運命と出会う。〈僕〉は民衆運動の指導者として頭角を現すがある事件をきっかけに街には不穏な動きが……20世紀アメリカ文学を代表する名作。いま読まれるべき名作。全米図書賞受賞。

12月

【エクス・リブリス】

パウリーナ・フローレス『恥さらし』（松本健二訳）

「恥」や「屈辱」など、胸の奥にしまい込み、埋もれていたはずの「疚しい」記憶……それらが人生に刻まれた瞬間が、ふとよみがえる。1990年代から現在までのチリを舞台に、社会の片隅で生きる女性や子どもの思いと現実をまばゆく描き出す9つの物語。2015年度チリ芸術批評家協会賞、2016年度サンティアゴ市文学賞を受賞。チリの新星による鮮烈なデビュー短篇集！

【U ブックス】

キルメン・ウリベ『ビルバオ - ニューヨーク - ビルバオ』（金子奈美訳）
飛行機で太平洋を渡っていく「僕」の脳裏に波のように寄せては返す思い出の数々……バスクから海を越えて届いた珠玉の処女小説。

* W・G・ゼーバルト、鈴木仁子訳

新装版『アウステルリッツ』『移民たち』『目眩まし』『土星の環』

「来年の隠し玉」（以下、すべて仮題）

1月

柴田元幸・小島敬太編訳『中国・アメリカ 謎SF』
〈謎SF〉の世界へようこそ！ 謎マシン、謎世界コンタクト…、中・米の現代文学最前線から、インスピレーションによって紡がれた偏愛の7篇の競演！

2月

【エクス・リブリス】

バク・ソルメ『もう死んでいる十二人の女たちと』（斎藤真理子訳）
著者は85年光州生まれの韓国女性作家。韓国文学の新たな可能性を担う作家として注目され続けている。光州事件や原発事故が起こった場所、釜山、京都、サンフランシスコ、ソウルなど、様々な土地を移動しながら、自身との距離を見つめて違和感を掬いあげ、前衛的な手法で描いた8篇。日本語版オリジナル編集による短篇小説集。

3月

【エクス・リブリス】

リン・マー『断絶』（藤井光訳）

2011年に「シェン熱」という未知の病が中国で発生。感染するとある種のゾンビ状態になり、生活習慣のひとつを果てしなく繰り返しながら死に至るといふ奇病だ。やがて熱病はニューヨークへも押し寄せ、人々が都会から脱出していくなか、もはや正気を失い息絶えた熱病感染者と主人公キャンディスしかない。キャンディスは脱出の途上で、ある生存者のグループに拾われ、安全な施設へ向かうという彼らの仲間に加わるのだが……。ニューヨーク公立図書館若獅子賞受賞。

5月

スティヴ・エリクソン『シャドウバーン』（柴田元幸訳）

21世紀も四分の一ほど過ぎたころ、サウスダコタのバッドランズ（不毛地帯）に、2001年に消滅したツインタワーが突如出現する。一方のタワーの中で目覚めたのは、エルヴィス・プレスリーの双子の兄で、現実には死産に終わったジェシー・プレスリーだった。作家の強靱な想像力とロックミュージックを通して狂おしく融合した、野心的な物語。エリクソン文学の集大成的な位置を占める力作。

【U ブックス 海外小説 永遠の本棚】

フォードル・ソログープ『小悪魔』（青山太郎訳）

地方都市の中学教師ベレドノフは出世主義の俗物で、嘘つきで打算的、傲岸不遜などうしようもない男。視学官のポストを求めて画策するがすべてが空回り、疑心暗鬼の末に奇怪な妄想に取り憑かれていく。ロシア象徴主義・デカダン派の作家が、田舎名士たちの俗物ぶりを毒のあるユーモアで戯画化して描いた傑作長篇。

6月

【エクス・リブリス】

ジェニー・エルペンベック『行く、行った、行ってしまった』（浅井晶子訳）
 大学を定年退職したばかりの古典文学教授リヒャルト。ベルリンのアレクサンダー広場でハンガーストライキをするアフリカ難民たちに関心を持つようになり、「見えざる存在」だった彼らとの付き合いは、次第に日常生活の一部となっていくが……。難民ひとりひとりの声に耳を傾け、ドイツでさまざまな角度から議論されている難民問題を扱った、現代ドイツを代表する作家による思索的な長篇小説。

「華語系文学シリーズ」（新シリーズ・スタート）

王徳威／高嘉謙／黄英哲／及川茜／張錦忠／濱田麻矢編

濱田麻矢・津守陽ほか訳『華語語系文学シリーズ 第1巻 華と夷の響き』

華語語系文学とは、中国語話者が創作する文学のこと。近年、台湾その他の華語社会で大きな注目を集めている、多様な声の響き合いを重視した文学概念を紹介するシリーズ。第1巻は中国、新疆ウイグル族自治区、台湾、香港、マレーシアなどの作家の小説から詩歌、散文、ルポルタージュまでを含む、華語語系文学の多元性を示す20篇を収録。

7月

【エクス・リブリス】

呉明益『眠りの航路』（倉本知明訳）

のちに『自転車泥棒』や『歩道橋の魔術師』にもつながる重要な長篇小説、待望の邦訳。ある日、数十年に一度と言われる竹の開花を見るために陽明山に登った「僕」は、自身の睡眠に異常が起きていることに気づく。「僕」の意識は、やがて戦時中に神奈川県高座の海軍工廠に少年工として渡った父・三郎の人生と交差していき、自身の睡眠の問題の原因が日本にあると考え、日本に行くことを決意する……。

ステューヴン・ミルハウザー『夜の声』（柴田元幸訳）

16篇の短篇を取めたVoices in the Nightは、多種多彩で、それぞれに独自の奇想が核にある。そのうち8編を取めた『ホーム・ラン』に続き、本書は残り8篇を収録して刊行。

8月

【エクス・リブリス】

ロドリゴ・フレサン『ケンジントン公園』（内田兆史訳）

永遠の名作『ピーター・パン』の生みの親、J・M・バリー。19世紀末ヴィクトリア朝からエドワード朝時代のロンドンと1960年代の「スウィングン・ロンドン」を交錯させながら、J・M・バリーの生涯を巧みな語りでなぞっていく。ロベルト・ボラーニョとも親交のあったアルゼンチンの作家による傑作長篇。

【ロシア語文学のミノタウロスたち】（新シリーズ・スタート）

ガイト・ガズダーノフ『クレールとの夕べ／アレクサンドル・ヴォルフの亡霊』（望月恒子訳）

1930年代にはナボコフに勝るとも劣らない評価を受けていた亡命ロシア人作家で、近年再評価が進んでいる。19世紀ロシア文学の伝統にプルースト的な文体を接続しているのが魅力。

9月

【エクス・リブリス・クラシックス】

イーヴリン・ウォー『誉れの剣II 士官たちと紳士たち』（小山太一訳）

アフリカでやらかした失敗のせいで内地に送還されたガイ・クラウチバックは、特別に編成されたコマンド旅団になんとか入りこみ、クレタ作戦に参加するが、そこで戦友たちの意外な面を目撃することに。第二次世界大戦に取材した《誉れの剣》三部作の第二巻。本邦初訳。

10月

【華語系文学シリーズ】第2巻

王徳威 / 高嘉謙 / 黄英哲 / 及川茜 / 張錦忠 / 濱田麻矢編

「華語系文学シリーズ 第2巻 南洋人民共和国備忘録」黄錦樹著、福家道信ほか訳

マレーシア華人を代表する作家、黄錦樹の短篇小説集。黄錦樹は1967年にマレー半島で生まれ、地元の中学・高校を卒業後、台湾に渡った。現在に至るまで故郷マレーシアの歴史の傷痕、華人社会と文化の苦しみを描く物語を書き続けている。

11月

【エクス・リブリス】

ショクラーフェ・アザール『スモモの木の啓示』

イラン・イスラーム革命に翻弄される、イラン僻地の村の5人家族を中心に、『千夜一夜物語』的な宝探し、スマホやSNSが小説世界に融合し、死者、幽霊、幽鬼が活躍する——13歳の少女バハールが語る魔術的リアリズム長篇。オーストラリアに政治難民として移住したイラン出身の作家がペルシア語で創作した、今年の全米図書賞の最終候補作品。

12月

【エクス・リブリス】

グゼリ・ヤーヒナ『ズレイハは目をあける』(守屋愛訳)

タタール系作家が自身の祖母の体験に着想を得て書いた長篇小説。近年のロシア語文学の特徴である歴史への着目や過去への志向、民族的・言語的越境性が盛り込まれており、デビュー作にもかかわらず、ロシア国内の権威ある文学賞を相次いで受賞している。

【Uブックス 海外小説 永遠の本棚】

ジョージ・エリオット『フロス河の水車場 上下』(小尾芙佐訳)

ジョージ・エリオットは、夏目漱石が作家修業中の野上彌生子に「海外の女

性作家で読むべき」と挙げた三人のうちの一人。本書は感受性豊かで情熱的な主人公と厚みのある脇役キャラクターたちが繰り広げる、愛と成長の壮大な物語。激しくも切ない愛の物語は、『嵐が丘』『ジェイン・エア』『高慢と偏見』と並ぶ4大恋愛小説。『アルジャーノンに花束を』『ジェイン・エア』『高慢と偏見』の小尾芙佐氏が、日本でのジョージ・エリオット観を一新する新訳に、満を持して挑む。

早川書房

★今年のイチ押し

◎ディーリア・オーエンズ『ザリガニの鳴くところ』友廣純訳（単行本）

◎マーガレット・アトウッド『誓願』鴻巣友季子訳（単行本）

◎コルソン・ホワイトヘッド『ニッケル・ボーイズ』藤井光訳（単行本）

★来年の「隠し球」（書名は変更の可能性があります）

メインの2球

◎カズオ・イングロ『クララとお日さま』土屋政雄訳（単行本）3月刊！

◎ダグラス・スチュアート『SHUGGIE BAIN』黒原敏行訳（単行本）

10月刊！

2月

◎ローレン・ウィルキンソン『アメリカン・スパイ』田畑あや子訳（単行本）
冷戦下、FBIで働く黒人女性のマリーは、ブルキナファソのカリスマ的リーダーを罠に嵌めようとするが……。愛か、使命か？ オバマ元大統領絶賛の、いまだかつてない歴史スパイ小説。

◎ジュリア・フィリップス『Disappearing Earth』井上里訳

カムチャツカの地方都市で幼い姉妹が行方不明になった。この事件は、半島の少女と女性たちの暮らしに影を落としていく。性・人種・階級で分断された社会に生きる女性たちの視点から語る事件、その真相は？ 《ニューヨーク・タイムズ》などの最注目目の1冊に選ばれたデビュー長篇。

3月

◎カズオ・イングロ『クララとお日さま』土屋政雄訳（単行本）

アーティフィシャル・フレンドであるクララは、店頭から人々を観察し、自分にもオーナーが現れることを願う……。ノーベル賞受賞後第一作となる待望の新作。

◎キャスリーン・デイヴィス『THE SILK ROAD』久保美代子訳（単行本）

北の果てで行なわれるヨガのクラスに集まった者たちは、想像力、不可避の死、魂の根源と行く末についての精神的な旅に出る。

◎リサ・タッデオ『THREE WOMEN』池田真紀子訳（単行本）

高校生時代に恋愛関係にあった教師を訴え、街での居場所を失うマギー。夫にしたがい、経営するレストランの従業員と関係を持ったことがその妻にばれて一方的に責められるスローン。学生時代にレイプされたことをきっかけに自己像が歪み、結婚後にダブル不倫状態に陥るリナ。事情と傷、欲望を抱える3人の姿を通して、女性の生と性の自己決定権を描くノンフィクション。

4月

◎チゴズィエ・オビオマ『An Orchestra of Minorities』栗飯原文子訳（単行本）

恋した女性のために大学へ行こうとした養鶏家の青年は、学費をすべて騙し取られるが。彼の守護霊<チ>がその悲喜劇を語る。『ぼくらが漁師だったころ』著者の長篇第二作。

◎エリザベス・ギルバート『City of Girls』（単行本）那波かおり訳

1940年。NYで劇場を営む伯母のもとに身を寄せた19歳の女性は、今まで知らなかった喜びと苦しみを知る。『食べて、祈って、恋をして』著者がおくる励ましの物語。

◎シモーヌ・ド・ボーヴォワール『Les Inseparables』関口涼子訳（単行本）

最近発見された、未刊行の1954年の作品。親友 Zaza とのかけがえのない友情について、シモーヌの視点から語られる貴重なショートノベル。

◎オィズル・アーヴァ・オウラブスドフティル『The Greenhouse』神崎朗子訳（単行本）

母親の温室でバラの手入れをする以外はまったく無能な僕、22歳。安穏とした生活は、母親の死とともに終わった。母親が遺した言葉と希少なバラに導かれるように、僕は未知の土地へ旅に出る。アイスランドを代表する作家、はじめての邦訳。

5月

◎ヴィエト・タン・ウェン『The Committed』上岡伸雄訳（単行本）

笑えながらも痛々しいピュリッツァー賞&エドガー賞受賞作『シンパサイザー』、待望の続篇。失敗と苦しみを重ねる主人公のスパイは、はたしてどこに向かうのか？

◎サリー・ルーニー『カンパセーション・ウィズ・フレンズ』山崎まどか訳 (単行本)

フランシスは作家志望の21歳の大学生。かつての恋人で今は親友のポビーと共にダブリンでポエトリー・パフォーマンスを行っている。二人の才能に目をつけたジャーナリストのメリッサと親しくなるが、フランシスはメリッサの俳優の夫に惹かれていく……。BBCドラマ化決定！ デビュー作にして《サンデー・タイムズ》21世紀の100冊に選出。《サンデー・タイムズ》文学賞新人賞受賞。ミレニアル世代から絶大な支持をうける新世代作家のデビュー長篇。

6月

◎ヴィルジニー・デパント『ヴェルノン・クロニクル2』博多かおる訳 (単行本)

かつては伝説のレコード店主、いまやホームレスのヴェルノン。彼の不思議な魅力にかつての友人や周りの人々が引き寄せられ、ヴェルノンは再び地下音楽シーンの中心に舞い戻る。しかし、彼が持っている、死んだ旧友アレックスの遺した謎のテープをめぐる陰謀が動き出し……。

7月以降

◎ピエール・ルメートル『Miroir de nos peines』平岡敦訳 (単行本)

ゴンクール賞受賞作『天国でまた会おう』に登場する少女ルイーザを主人公とした、三部作完結篇！

◎ダグラス・スチュアート『SHUGGIE BAIN』黒原敏行訳

2020年ブッカー賞受賞作！

◎ヒラリー・マンテル『THE MIRROR AND THE LIGHT』宇佐川晶子訳

『ウルフ・ホール』三部作完結篇

◎C Pam Zhang『HOW MUCH OF THESE HILLS IS GOLD』

◎Maaza Mengiste『THE SHADOW KING』粟飯原文子訳

◎金宇澄『繁花』

王家衛、新作テレビシリーズ原作